

アドラーは啓示を受けたのか？

A・P・アドラー Adolph Peter Adler (1812-1869) は、キルケゴールより1歳年長にあたる牧師であり、彼とも親交があった。アドラーは当時の慣行に反して、デンマーク語で学位論文を書いたが、キルケゴールは彼に続いて同じく学位論文をデンマーク語で書いた。一方でアドラーはヘーゲル主義者であったが、他方キルケゴールは真っ向からヘーゲルには反対の立場だった。



A・P・アドラー
(1812～1869)

ところが、そのアドラーは、1843年に出版した説教集の中で、自分が直接イエス・キリストの啓示を受けたと驚くべきことを述べたのだ。イエスは彼に対し、ヘーゲル哲学に依拠するこれまでの著作を焼却し、聖書のみを拠り所とするように命じたと言う。この知らせを受けたデンマーク国教会当局は、彼が当時興奮して錯乱状態にあったと断定。翌年その牧

師職停止を命じ、翌々年には彼から牧師資格を剥奪した。

キルケゴールはこの事件に衝撃を受けた。アドラーは本当にキリストの啓示を受けたのか？ また、当局の罷免措置は正当なものだったのか？ 彼はアドラーが罷免後に刊行した著作を入手し、アドラーの真意を探るべく研究に没頭した。この研究はキルケゴール独自の心理学的考察によって掘り下げられている。彼は大部の原稿を書いたが、それを公にすることはアドラーを傷つけると考え、自ら出版することはなく、それらの原稿は遺稿として残された⁽¹⁾。

結論から言えば、キルケゴールの意見は一見守旧的とも受け取れるものである。すなわち、アドラーは啓示に関する主張を無条件に撤回すべきであったが、彼が撤回しなかった以上、精神錯乱状態にあったという理由で、当局が彼を罷免したのは全く正当なものだと見なしたのである。彼は、アドラー研究の副産物として、天才と使徒との質的相違を確信し、またキリスト教世界にあって真のキリスト者になるという課題を自覚した。アドラーの場合、これらのことが全く不分明なままであり、結局のところ宗教的混乱に陥っただけだったというのである。

宗教的混乱の帰結

アドラーの混乱ぶりは、当局の質問状に対する回答に端的に現れていると、キルケゴールは見た。すなわち、当初アドラーは自ら啓示 Aabenbaring であると主張していたものを、それが実は覚醒 Opvækkelse であり、さらに一種の靈感 Begejstring へとトーンダウンさせた。もしこれを終始一貫して啓示だと貫徹していれば、あるいはアドラーは「使徒」となったかもしれない。しかし、たとえ啓示であったとしても、そのことの承認を当局に求め、牧師職を続けるのは誤りである。他方それが実は靈感だったとするならば、もはや神は関係ない。その場合、自己自身に責任を負う「天才」として、彼は振る舞うべきだった。しかし、彼が後に書いた書物には啓示の影響もなく、天才の靈

感も反映されていない。これは要するに、アドラーは使徒としては偽者であり、天才としても中途半端な者だったことを示すものである。まさに宗教的混乱と言うほかはない。

キルケゴールは、このようにしてアドラーに対する手厳しい批判を展開したが、彼はこれを書物として出版せず、アドラーの名前を伏せた形で、その内容の一端をわずかに「天才と使徒の相違について」などに纏めて公にしたにとどめた。

アドラーの宗教的混乱から、我々はどのような教訓を汲み取ることができるのだろうか。彼はキリストの啓示を受けたと称したことにより、キリスト教の正統から外れてしまった。かといって、彼はその啓示を靈感へとトーンダウンさせたため、キリスト教の異端にもなれなかった。要するにアドラーは、正統でも異端でもなく、ただ単に宗教的に破綻をきたしたただけであった。

キルケゴールの議論の射程

しかし、キルケゴールは単に正統・異端のレベルで、アドラー事件を取り上げたわけではない。彼の議論の射程は、どこまでも宗教の真理へと肉薄することにあった。正統か異端かという問題設定では、そこまで辿りつくことができない。正統とは多数派が握り、異端とはそこから弾かれてきた少数派であるが、どちらも歴史的に成立したものに過ぎないからである。宗教の真理は、神と人間との間の弁証法な緊張関係の中でこそ問われるものである。そこで焦点になるのが、単独者として実存する人間の主体的なあり方である。

その意味で言えば、彼は、主体性に重きを置くアドラーの姿勢を実はひそかに買っていた。アドラーはたしかにヘーゲル主義者ではあったが、決してヘーゲルに心酔しているわけではなかった。そのことは、彼の学位論文「最も重要な形態における孤立した主体性」(1840)においてすでに窺うことができる⁽²⁾。彼は、この論文の中で、孤立した主体性を存在の単独性 Enkelthed と見なし、これをキリスト教と結びつけようと試みた。つまり、絶対的観念論(ヘーゲル)とキリスト教の実存思想(キルケゴール)との間に立つ思想を形成しようとしていたとも読めるのである。しかし両者の間には架橋できない深淵がある。彼の悲劇は、ヘーゲルに留まることができず、かといってキルケゴールへと突破できなかったところにあった。そして、彼はそのまま牧師になってしまい、結果として「啓示を受けた」という形でヘーゲルを破棄しようとした。しかし、それは宗教的な破綻であったと同時に、思想的な挫折でもあった。

宗教の真理は、哲学的に論証できるものではない。また歴史的に検証されるものでもなければ、科学的に確証されるものでもない。まして、投票による多数決で決まるものでは絶対にならない。それは、ひたすら単独者としての主体的信仰のあり方に掛かっているのである。そして、そこには新しい啓示はもはや不要なのである。

[注]

(1) 原佑・飯島宗享訳『アドラーの書』「キルケゴールの講話・遺稿集」第9巻、新地書房、1982年。

(2) 大坪哲也編訳『キルケゴールとデンマークの哲学・神学』(晃洋書房、2018年)に所収。